

川原田遺跡縄文時代中期中葉の土器群について

寺内 隆夫

I はじめに

御代田町を含む東信地域の縄文文化と言えば、敷石住居跡を代表とする縄文時代中期後葉から後期の遺跡が思い浮かぶ。それらの時期の遺跡や遺構については戦前からの長い研究の蓄積があるからである。一方、それよりわずかにさかのぼった縄文時代中期中葉については、資料が少なかったことによって研究が低調であった。土器に関して見ると、地元の土器の研究が立ち遅れ、いわゆる「中部高地」の土器として一括される傾向にあった。それは、多少在地化しているものの、基本的には八ヶ岳西南麓から西関東を中心とした勝坂式土器の文化圏（あるいは井戸尻文化圏）の縁辺部に入るだろう、といった漠然とした理解のされ方につながっていた。

1984年、野村一寿氏は塩尻市焼町遺跡第1号住居址から出土した「曲隆線文」を持つ土器に着目した（野村1984）。この論考において「焼町土器」と略称された土器は、北陸系の土器でも、いわゆる「中部高地」の土器でもない、独自性を示す土器として再発見された。その分布圏が長野県から群馬県に及ぶとの指摘から、その後、東信地域が本場ではないかとの予測が立てられ、俄然、本地域の縄文時代中期中葉の資料に注目が集まった。

折しも1980年代以降、大規模な開発やは場整備事業が相次ぎ、遺跡の立地する土地を広範囲に掘削・造成する動きが盛んになっていた。こうした遺跡の保存・活用にとって待ったなしの状況下、工事に先立つ発掘調査の実施について理解を得られる風潮が生まれ、歴史の空白を埋める貴重な資料が相次いで発見されていった。

川原田遺跡の「躍動感あふれる土器」（堤1992）は、（1）縄文土器研究者の東信地域への注目と、（2）開発に伴う事前発掘の実施、の両者があつてはじめて、「東信地域を本場とする縄文中期中葉の独自の土器文化、それを代表する土器群」として見い出されたのである。もし、大規模調査が行われず、一部の縄文土器研究者の関心だけであれば、今世紀中にこれほど良好な資料に出会える保証はなく、研究も進展しなかったであろう。一方、開発に追われ、発掘資料のみが山積する状況であったならば、単に「少々変わった、いい土器が出た」で終わってしまっていたかも知れない。その場合も、「縄文時代中期中葉に、八ヶ岳西南麓～西関東の土器文化や北陸の土器文化とは異なった、独自な土器文化がここ東信地域で花開いていた」との認識にたどり着くには、さらに長い年月を擁したかも知れない。

80年代から90年代前半にかけては、大規模開発（調査の有無を問わず）による遺跡の相次ぐ消

滅と、消滅してゆく遺跡を少しでも活かそうとする研究のデッドヒートといった状況であった。川原田遺跡の資料は、こうした中で偶然、研究者の関心と資料の発見がかみ合った例の一つである。ただし、本格的な研究そのものは、この報告書の刊行後、といった段階である。以下の拙い分析が川原田遺跡の、また、この地域の縄文時代中期文化復元のためのたたき台となれば幸いである。

さて、川原田遺跡の縄文時代中期中葉の土器資料そのものに視線を戻そう。言うまでもなく、この資料は、いわゆる「焼町土器」を理解する上で、現段階の第一級資料である。その理由の第一点は、勝坂式土器などの他型式土器の中に混在していたのではなく、「焼町土器」が組成の中心を形成していたことである。このことは、「焼町土器」の本場が御代田町を含む東信地域であることを示している。第二点は、多量の「焼町土器」が出土したことである。このことは、それぞれの「焼町土器」に共通する製作方法や、装飾の特徴を導き出すのに有効となる。第三点は、「焼町土器」が複数の住居址から出土しており、特に、重複する住居址のいずれからも出土していることである。このことは、「焼町土器」が一過性の特殊な土器ではなく、川原田ムラで何世代にも渡って使われ続けたことを示している。また、その間に装飾の変化が見られ、それぞれの時期の流行り廃りをとらえることができる。さらに、「焼町土器」がどのようにして生まれ、衰退していくかを知ることができる。

このように、川原田遺跡の資料は、東信地域の縄文中期中葉の土器文化を語る上で基準資料の一つになるであろう。これらの点を踏まえて、ここでは川原田遺跡の縄文中期中葉の土器群の概略を示すこととする。

2 時期区分

(1) 時期区分作業

1 竪穴住居の重複関係による仮区分（第1図）

川原田遺跡は包含層の薄い集落遺跡であるため、出土時の新旧関係を示す事例として住居の重複関係を使用する。ただし、重複関係を示す事例の内、土器資料が微量のものや、土器の属性の説明に耐えられない破片資料だけの例は除く。また、住居凹地の再利用などによる土器の混入や流れ込み、住居内層位などについては、その都度検討を加えるが、いずれの住居も壁高の残存が少ないので詳細な分析は行えなかった。そのため、ここでは1住居内の土器をほぼひとまとまりとして、仮区分を行う。

▲ J 25住→J 11住→J 30住

J 25住は掘り込みがないが、炉址付近にまとまって出土した3個体をほぼ同時期の資料と捉え

た。8の土器が勝坂III式（藤内I式段階）⁽¹⁾であり、他の2個体もほぼ同時期と思われる。J11住は「焼町土器」を多量に出土した住居の一つである。大半の土器が、住居中央の床面近くで出土しており、勝坂IV式の古い段階（藤内II式段階）24を含んでいる。J30住は土器量は少ないものの、勝坂V式（井戸尻式段階）の8が床面近くから出土している。

▲ J15住→J12住

J15住は勝坂II式（新道式段階）の44と勝坂III式古段階の45を出土し、「焼町土器」を多量に出土したJ12住に切られる。J12住には勝坂IV式（藤内II～井戸尻I式段階）の43・44・47が含まれている。伴出する勝坂式土器との関係で言えば、J11住出土の「焼町土器」がJ12住より古くなる可能性を持っているが、川原田遺跡内の住居の切り合い関係や層位では確認できない。

▲ J51住旧炉→新炉

J15住・J25住に含まれる勝坂式土器は既存の型式研究から2時期に分かれる。その2時期区分に対応する良好な住居の重複関係は見られないが、強いて上げれば、J51住の2個体の炉埋設土器の新旧関係となる。

▲ J4住→J3住炉

J11住と土器量の少なかったJ30住の新旧関係を補足する資料である。J4住には「焼町土器」が多く見られ、J3住炉は、勝坂式土器末期の土器である。

▲ J5住→J6住

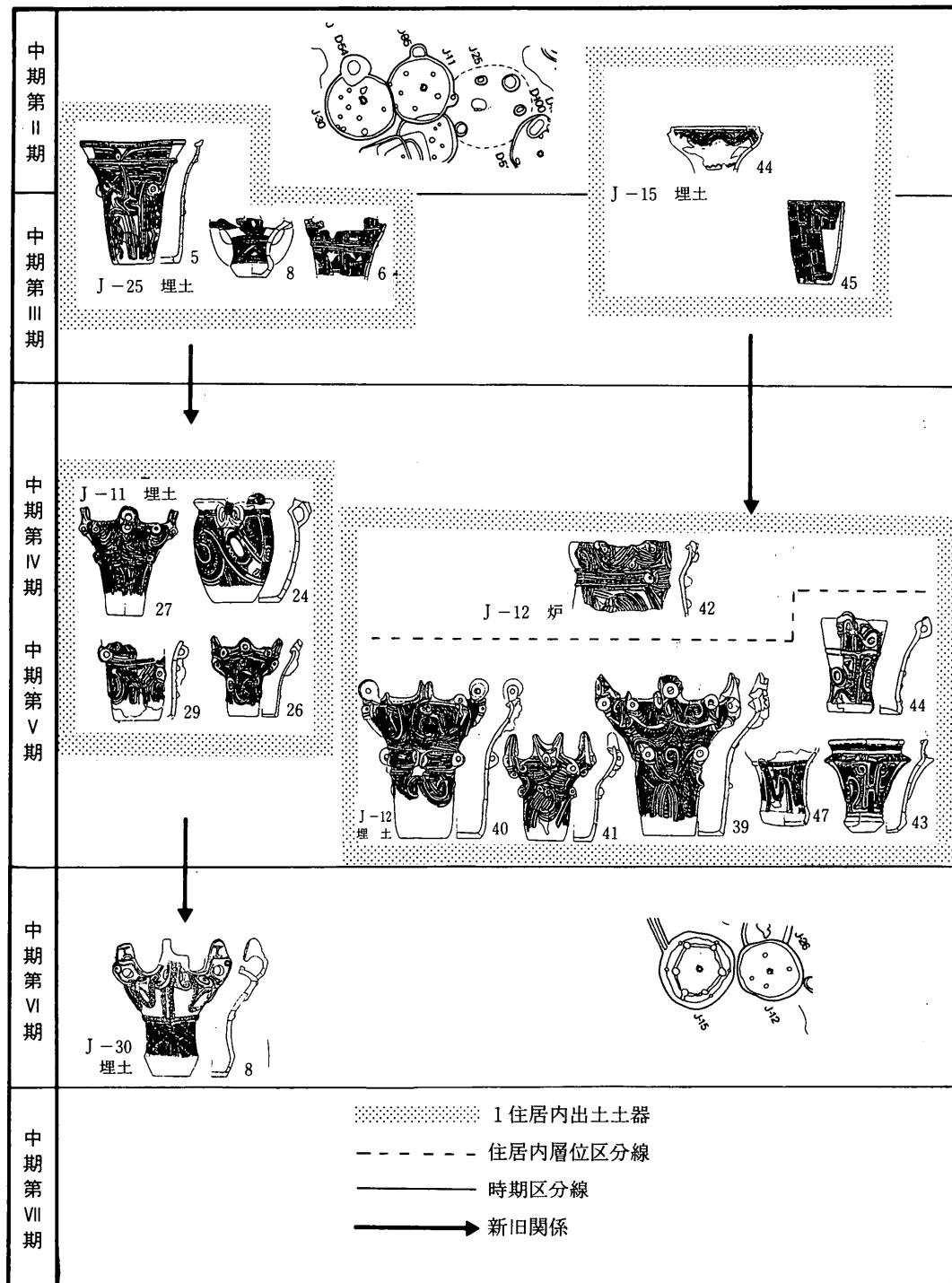
本例は、「焼町土器」の最盛期（J5住）と衰退期（J6住）の新旧関係を示す資料である。ただし、J5住内の出土状況を見ると勝坂V式土器48・49が比較的上層にあり、「焼町土器」が下層にある傾向を示しており、J5住の「焼町土器」を単純に勝坂V式に併行させることができない。そのため、勝坂IV式土器を出土しているJ12住との関係は、個々の土器の属性分析にゆだねざるを得ない。J6住からは加曾利E式土器がほとんどなく、勝坂V式併行期に収まる可能性が高い。

▲ J5住→J7住

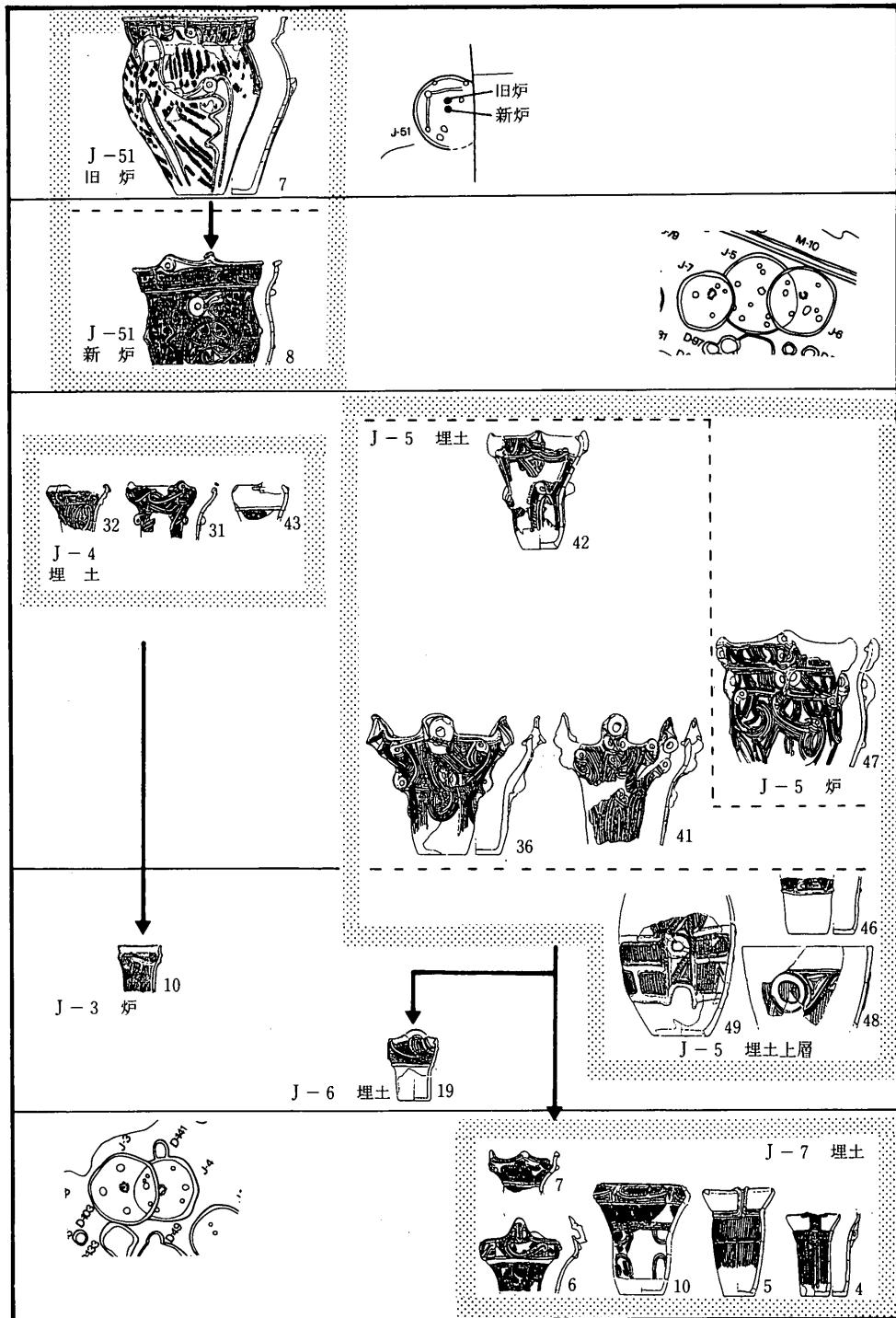
加曾利E1式土器を主体とするJ7住には、「焼町土器」がほとんど含まれておらず、川原田遺跡の「焼町土器」が加曾利E式期以前に消滅に向かっていることを示している。

2 既存型式・編年研究からの補正

川原田遺跡における縄文中期の土器を概観すると、住居の重複関係の見られない五領ヶ台式土器や良好な重複事例の認められない加曾利E2式土器などが存在する。これらの資料を時期区分に加える必要がある。次に、住居の重複関係は見られなかったものの、勝坂式土器の編年観から、J11住とJ12住を2細分することが可能であろう。これによって、川原田遺跡の縄文中期の土器を8時期に大区分する。また、細別については次章にゆずる。



第1図 川原田遺跡の縄文時代中期中葉土器出土状況による新旧関係模式図



(2) 時期区分の概要

中期中葉の土器を分析する前に、その前後を含めた縄文時代中期の8時期区分の概要を示しておく。

- I期 五領ヶ台式土器が包含層に微量認められる。縄文の施された五領ヶ台II式(図版205-58・59)と角押文(連続押圧)の見られる図版205-49の2細分が可能である。
- II期 勝坂I式期に併行する土器は、本書掲載資料では確認されない。勝坂II式期、すなわちJ15、24、50住、51旧炉などの資料をもとに、勝坂II(新道)式、阿玉台式II類、後沖式、「焼町土器古段階」などの土器をII期とした。川原田遺跡に竪穴住居が作られ始める時期である。阿玉台式土器を基準に細分が可能である。勝坂式・阿玉台式においては、II期とIII期に比較的大きな変化が認められるが、川原田遺跡における「焼町土器古段階」の成立を考えるには、II期の中での細分が有効になると考えられる。
- III期 J25住をはじめ、J16、20、51住などの資料を中心に勝坂III式古段階(藤内式)、阿玉台式III類、「焼町土器古段階」を含む時期をIII期とした。
- IV期 J4、5、11住の資料を中心に、「焼町土器」が組成の主体をなし、勝坂IV(藤内II～井戸尻I)式の古い段階の土器を伴出する時期である。型式的に古い要素を持つJ5住42の段階には、勝坂III式を伴出する可能性が考えられるが、本遺跡例では不明確である。
- V期 「焼町土器」の最も発展する時期であり、勝坂IV式の新しい段階の土器を伴出するJ12住やJ5住の一部がこの時期に相当する。ただし、川原田遺跡ではIV期との新旧関係を保証する出土状況は確認できない。
- VI期 J3、6、30住の資料を中心に「焼町土器」が衰退する時期にあたり、勝坂V(井戸尻)式を伴う。
- VII期 J7住の資料を中心に、加曽利E1式土器、曽利I式土器がほぼ均衡してみられる。本遺跡においては「焼町土器」の文様の残存は皆無である。
- VIII期 J13、27住、D96土坑の資料から加曽利E2式土器の時期に相当し、唐草文土器が加わる。

3 縄文時代中期中葉(II～VI期)の土器について

(1) 川原田遺跡出土土器群分析の視点

川原田遺跡出土の土器で最も注目されるのは、これまで資料が少なく研究が遅れてきた「焼町土器」である。ここでは、その「焼町土器」を中心に分析を加えることとする。

「焼町土器」は「焼町遺跡第1号住居出土土器とその類例」の略称(1984野村)であり、その

主要な装飾は「曲隆線文」である。これまで、型式設定に値する遺跡が発見されて来なかつたため、「略称」のまま使用されてきている。型式設定のための条件が整いつつある現在、焼町遺跡は分布圏の縁辺に位置することが明らかとなっている。しかも、焼町遺跡には完形に近い土器が1個体しかなく、「焼町土器」の型式内容を示す基準資料としてはあまりに少なすぎる。そのため、筆者としては、型式名としてふさわしい遺跡が発見できしだい、新たな名称を付けるべきであると考えている。しかし、現段階では「焼町土器」の略称を踏襲して記述を進めていくこととする。

また、「焼町土器」の範囲についてはいくつかの異なる意見が提出されている（1996小林）。筆者の立場は、土器装飾構造の根幹に関わる「装飾の分割」と「各個別装飾の統括」の原理（統辞部門）を基準として「型式群」をまず区分する立場にある（1988寺内）。中期中葉には、まず勝坂式土器と後沖式土器と阿玉台式土器の間で、差異が顕在化してくる（1996寺内）。この地域を主要な分布圏として持つ後沖式土器は、1. 器面を文様帶ごとに明確に分割すること。2. 個別装飾を分割された範囲内や区画内にはめ込むこと。を基本的な原理としていた。こうした分割・区画といった嗜好を打破し、流動する曲隆線を軸に各種装飾を配置する方向へと変化した点は、土器装飾構造の根幹に関わる変化としてとらえることができるであろう。そして、その時期は川原田遺跡の縄文中期II期2段階にあたる。⁽²⁾

土器装飾構造は、集団の価値観や世界観を反映していると考えられるため、ある一定期間存続することになる。教科書的には、生成→発展→展開→解体の各時期を経過するが、それをおてはめると、川原田遺跡の縄文中期II・III期は曲隆線文を主体とする装飾の生成～発展段階にあたると考えている。ちなみに、IV期～V期は展開（+発展）、VI期が解体段階である。その間、個別装飾においてはさまざまな変化を見せるが、装飾の根幹である「曲隆線」を軸とする原理は踏襲され続ける。

よって、筆者はII期2段階からVI期の内、「曲隆線」を装飾の根幹に据える土器群を「焼町土器」として記述していく。

川原田遺跡には、さまざまな地域の特徴を持った土器が入り込んでいる。それぞれの土器の違いは、（1）装飾の形・モチーフ、（2）製作技法など、によって知ることができる。前者では、文様の配置や分割方法などの装飾構成方法に関わる点と、各土器群を代表する装飾（個別装飾・複合装飾など）の存在によって分析が可能である。また、後者では胎土中の混和材の選択、焼成方法の違い、装飾のための施文具の違いや施文方法の違いによって分析が可能となる。これらの視点から、各段階の土器群の地域や系統を明らかにし、さらに細分を行っていくこととする。

(2) II～III期の土器

系統の異なる土器を中心にして

この時期に属する遺構は、住居の新旧関係資料として使用したJ 15、25、51住のほか、II期では、J 9、24、34、50住、III期ではJ 16、20、28住が該当する。土坑ではD54、83、117、147などに資料がある。

II期～III期には、在地の「焼町土器古段階（新巻土器）」、阿玉台式土器、勝坂式土器、後沖式土器、その他、の土器が認められる。この段階の細分には阿玉台式土器が理解しやすいので阿玉台式土器の変遷を確認したのち、他型式の土器を見ていくこととする。

A 阿玉台式土器（第2図） 東関東地域を主とする土器で、II期の前段階（勝坂I式段階）をピークとして東信地域に入ってくる。川原田遺跡では、阿玉台式II～III類土器が、装飾技法の分析からJ 50住炉→J 24住覆土→J 20住炉の順に変遷していくものと考えられる。

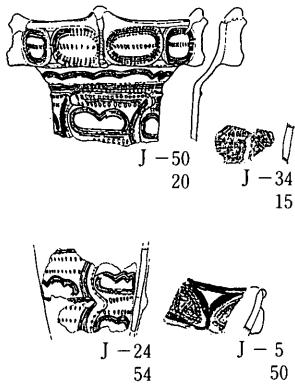
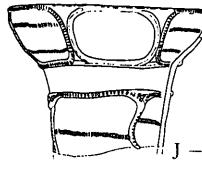
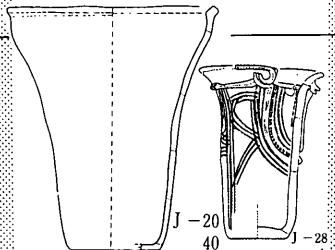
J 50住炉→J 20住炉の土器を比較すると、後者では楕円形区画文が大型化する。さらに、隆線では体部の横位隆線と懸垂文との接合部において、前者では阿玉台式I類段階に多い「親指でつぶすような平坦な部分」が懸垂文との接合部（第2図）に見られるが、後者ではあっさりとした連結となっている。また、隆線上の連續刻みが後者で多く施されるようになる。この隆線上の刻みの影響によって、後者の隆線が断面台形に近く変化しているのに対し、前者の隆線は阿玉台式I類の流れを汲む断面三角形状の部分を多く残存している。これらの点から、J 50住炉→J 20住炉の新旧関係を想定したい。

次に、沈線装飾に目を転ずると、区画文中央などに施されている連續刺突文が、J 50住炉では器面に対し浅い角度で施されているのに対し、J 20住炉では垂直に近くなっている。この刺突文の変化を見ると、両者の中間段階にJ 24住54が入ることが理解できよう。

以上、川原田遺跡出土の阿玉台式土器を、II期1段階=J 50住炉（阿玉台式II類）→II期2段階=J 24住（阿玉台式II類）と捉え、大型の楕円形区画文を持ち、押し引き文のなくなるJ 20住炉をIII期（阿玉台式III類⁽³⁾）と考えておく。

阿玉台式土器の在地化について見ていくと、川原田遺跡での定着度はひじょうに薄い。J 50住21は色調が在地特有の赤みがかったものとなり、阿玉台式の装飾構成方法や区画文などが稚拙となっている。ただし、半截竹管による平行沈線文は竹管の内側面（ハラ）の形状が器面に付いておらず、阿玉台式特有の施文具加工と施文手法を見せていている（第2図）。J 51住11・18は阿玉台式III類の在地化したものと考えられる。

このほか、阿玉台式の半截竹管を継承する土器として、J 28住4を挙げることができる。ただし、胴長の器形、胎土など、すでに群馬県域を中心に広がる類型であり、川原田遺跡内で阿玉台式土器の影響を受けて成立した土器ではない。

	阿玉台式土器	在地で変容した 阿玉台式系統の土器	半截竹管による浅い平行沈線文を持つ土器。無文土器（群馬県主体か）	半截竹管による平行沈線文を持つ勝坂式土器
川原田中期第Ⅱ期				
川原田中期第Ⅲ期				

第2図 阿玉台式土器及び半截竹管による浅い平行沈線文を持つ土器

また、この後の段階には阿玉台式土器の影響はほとんど引き継がれない。

B 「焼町土器古段階」 縄文を地文に、結節部に突起を持つ懸垂文を主装飾とし、沈線が沿う土器群。本来、「後沖式」からつながる縄文のつかない類型もあるが、川原田遺跡では不明である。本稿では、東信地域において区画文を主体とする土器群（後沖式土器）から、区画を極力さけ、蛇行する隆線装飾に独自性を求めた土器の成立をもって「焼町土器」とする考え方をとり、⁽⁴⁾この段階の土器を「焼町土器古段階」として説明を加える。

阿玉台式土器の細分を参考に、それぞれの住居から出土している土器を見ると、J 50住22、J 51住7→J 24住47、48、49、J 20住33→J 20住、J 51住8、10に3細分が可能であろう。J 25住5、J 51住9の2点は筆者の考えがまとまっているため、II期～III期の中間に位置づけておく（第3図）。

隆線装飾の比較的単純なJ 50住22とJ 51住7をII期1段階に置いた。

東信地域の縄文施文土器は、五領ヶ台終末期に激減し、勝坂I式併行期にもほとんど見られない。それが、再び勝坂II式併行期の本土器群で復活する。こうした傾向は、若干の時期差と程度の差はあるが、勝坂式土器との並行変化を示している。そうした点から、J 51住7を勝坂II式併行の川原田II期に置いた。ただし隆線装飾の形状だけを見ると古い様相を示しており、沈線も沿わないことから、「焼町土器」からは除外しておく。

また、両者とも、在地の要素とともに、北信地域の前段階に見られる装飾技法を取り入れている。50住22に見られる2本の隆線内を指でなでる手法は、北信地域の仮称「深沢式土器」(高橋1989)の系譜を引いている。また、J 51住 7 の口縁部文様帶の突起や平行沈線脇の連続刻みも北信地域に多く見られる手法である。

II期2段階の資料には、北信地域の要素が認められなくなる。

II期2段階のJ 24住47に見られるような、角のしっかりした大形鋸歯文は、蛇行する (J 51住 9) など粗雑化の道をたどる。一方、III期には蛇行した沈線がさらに発達する傾向 (J 51住 8) を示す。II期2段階とIII期の区分については、勝坂式土器と阿玉台式土器を基準としており、「焼町土器古段階」の分離については明確な答えを持ち得ていない。今後、他遺跡の資料と比較しながら検討したい。

C 後沖式土器 前段階 (勝坂 I 式併行期) に東信地域の主体をなす土器であるが、川原田遺跡II期ではJ 16住20ほか数点が残存しているのみである。この土器群特有の逆「U」字状懸垂文は「焼町土器」へ継承される。また、斜行沈線文はJ 51住10、J 5住42などに一部分残存し、沈線内を再度刻む手法は沈線内再押圧となってJ 35住 8 などに継承される。

D 勝坂式土器 各住居に破片資料が多量に入っている。「焼町土器」について多い土器群である。ただし、本場 (場所の特定はできないが) からの搬入品と推定される土器 (J 15住45など) とともに、隆線脇に2条の沈線がめぐり、一部で沈線内再刺突の見られるJ 24住52。口縁部文様帶の突起や体部に独立した三角形区画文に独自性を示すJ 16住22。隆線脇に半截竹管による平行沈線文を多用するJ 25住 8 など、在地かあるいは群馬県側で製作されたと思われる土器が存在する (第3図)。

E その他 J 25住 6 など、地文に縄文を施し、半截竹管による平行沈線を直線的に施文する土器が存在する。2条の沈線を強調することなく、竹管の内側面の形状が写し出される点を特徴とする (第3図)。関東方面から持ち込まれた可能性の高い外来系の土器である。

F 小結 「焼町土器」成立と異系統土器

II～III期は、「焼町土器」成立に関わる重要な時期である。

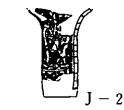
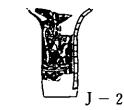
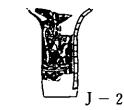
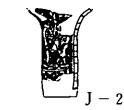
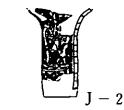
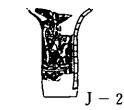
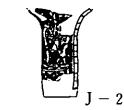
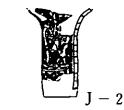
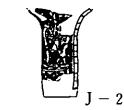
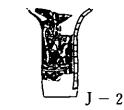
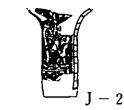
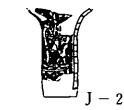
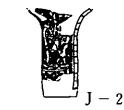
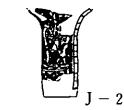
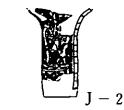
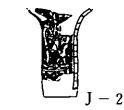
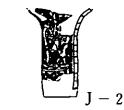
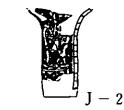
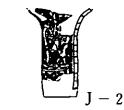
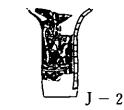
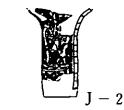
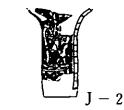
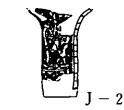
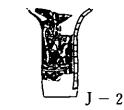
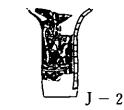
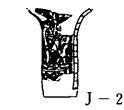
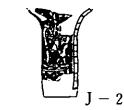
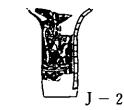
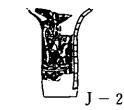
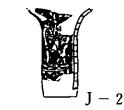
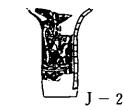
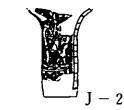
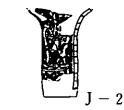
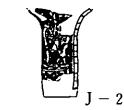
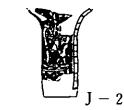
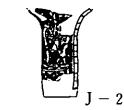
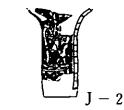
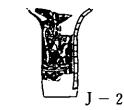
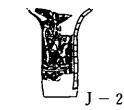
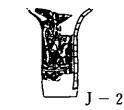
川原田ムラにおいて、土器組成に占める系統別の割合を大雑把に見ておくと、「焼町土器古段階」が5～7割(正確に算出した割合ではない)、次いで勝坂式土器、さらに阿玉台式土器、その他の順になろう。勝坂式土器・阿玉台式土器ともに、施文手法などから在地化した例が含まれている (第3図)。特に、勝坂式土器は在地製作と思われる土器が、後の時期にも引き続き認められ、東信地域への勝坂式土器製作集団の定着をうかがわせる。このことは、八ヶ岳を挟んだ西側の地域との交流の強さを物語っている。ただし、本稿で在地としたものの中には、群馬県域で製作された土器を含んでいる可能性が高く、今後、胎土分析などを通して確定していきたい点である。

勝坂式土器		在地系		阿玉台式土器		その他(群馬系など)			
川原田中期第Ⅱ期	在地or群馬系	勝坂道	後沖式土器	J-16 20	J-50 22	J-51 7			
	J-15 44								
	J-24 52								
			「焼町土器」	J-24 49	J-24 48	J-20 33			
				J-25 5	J-51 9	J-51 8			
				J-51 10	J-20 32				
中期第Ⅲ期		勝内坂		J-4 32	J-4 31	J-35 8	J-5 42	J-77 228	
	J-15 45			J-11 26	J-11 29	J-11 27	J-11 28	J-12 42	
川原田中期第Ⅳ期	J-11 24	勝坂		J-12 41	J-12 40	J-5 36	J-12 39	J-5 41	
				J-5 47					
川原田中期第Ⅴ期	J-12 43	井戸尻Ⅰ		J-12 41	J-12 40	J-5 36	J-12 39	J-5 41	
	J-12 44			J-5 47					
川原田中期第Ⅵ期	J-5 49	井戸尻Ⅲ		J-46 3	J-8 10	J-6 19			
	J-30 8			J-1 9					

第3図 川原田遺跡縄文中期中葉土器編年表

※ 在地系とは、東信地域で製作されたと思われる土器。ただし、一部群馬県域のものを含む。

※ 東信地域・在地・群馬とともに、厳密な地域区分ではなく、幅を持たせて考えていただきたい。詳細は資料の増加を待ちたい。



J 16住22、J 25住8は、施文手法などから群馬県域から持ち込まれたものか、あるいは、在地製作とした場合でも群馬県域の勝坂式土器の影響を受けたものと考えられる。また、阿玉台式土器の搬入・在地化の動き、J 28住4の類型やJ 25住6の類型などの存在から、関東地域との交流を示す資料も多い。

このように、この時期は地元独自の土器だけでなく、八ヶ岳以西の地域や関東地域の土器が集落内の土器組成の半数近くを占める状況であった。こうした影響力の強い周辺地域の土器の中に埋没することなく、地元の土器として成立したのが「焼町土器」である。この土器が地元の系統を引く点は、浅くて太い単沈線による施文手法などの製作技法によって知ることができる。また、土器組成中で大容量の器の多くが「焼町土器」である点からも逆に、この土器が在地の土器であることが類推できる。

この在地の土器が、その個性を主張する方法は、多量に流入していた勝坂式土器や阿玉台式土器と異なる装飾を採用し、強調することであった。この時期の勝坂式土器や阿玉台式土器は、「区画する」ことを装飾の重要な要素としている。J 15住45のパネル文、J 25住8の三角形区画文、J 20住41の楕円形区画文などがそれである。これに対して地元の土器は、区画文を避け、蛇行する隆線文を主装飾に据え、「流動する」ことを主眼とする装飾を確立していった。

この「流動する」基本モチーフを支える装飾が「連結部を有する隆線文」であり、「隆線に沿う複数の沈線文」であり、「連結部に貼付される貼付文」である。これら、「焼町土器」の基本はこの時期に成立するのである。

そして、これらの内、貼付文を除く基本装飾のすべては、主に千曲川中流域から信濃川上流域に分布している仮称「深沢式土器」の装飾要素を採用したものと考えられる。

このように、東信地域の独自性を示すための在地の土器は、最も身近に存在する異系統土器である勝坂式土器や阿玉台式土器の装飾を極力避け、差異を明確にしたのである。筆者は、これをもって「焼町土器」の成立と考えたい。

(3) IV・V期の概要

IV期の資料を出土した遺構には、住居の切り合い関係で使用したJ 4、5、11住。それに併行するJ 2、29、35住。D 77、102土坑などがある。V期には、J 5、J 12住ほかに資料がある。

IV期になると、縄文を地文とする土器群が激減し、曲隆線とそれに沿う沈線文を主とする「焼町土器」が発達し、組成の大半を占めるようになる。これに、勝坂式土器が一定量伴出するが、阿玉台式土器は皆無となる。勝坂式土器は在地製作と思われる土器が定着している。「焼町土器」は独自の装飾が強調され、他型式の影響が目立たない時期である。

V期には、「焼町土器」の装飾がさらに発達をとげ、組成の主体的な地位も確保しつづける。こ

れに、勝坂式土器が一定量伴出する。

残念ながらこの時期内での遺構の重複は認められない。ただ、伴出する勝坂式土器の新旧から、J 11住→J 12住の関係が類推できる。J 5住の資料については、新しい時期の勝坂式土器が出土しているが、「焼町土器」との出土状況に若干の上下差が認められるため、J 12住とほぼ同時期として押さえておく。さらに、III期の「焼町土器古段階」との型式特徴の類縁関係から、J 5住42などを古い段階として設定しておく。

(4) 「焼町土器」の変遷

IV・V期の主体は言うまでもなく「焼町土器」である。ここでは、「焼町土器」にのみ焦点をしづらって、その変遷と特徴を明らかにしていきたい。ただし、あくまでも川原田遺跡の資料に限定して考えた場合の変遷であり、「焼町土器」全般の変遷と特徴については、別稿を考えている。また、深鉢形土器以外の器形については変遷を追える良好な資料がなく、除いてある。

A 横位の器面分割（＝文様帶）

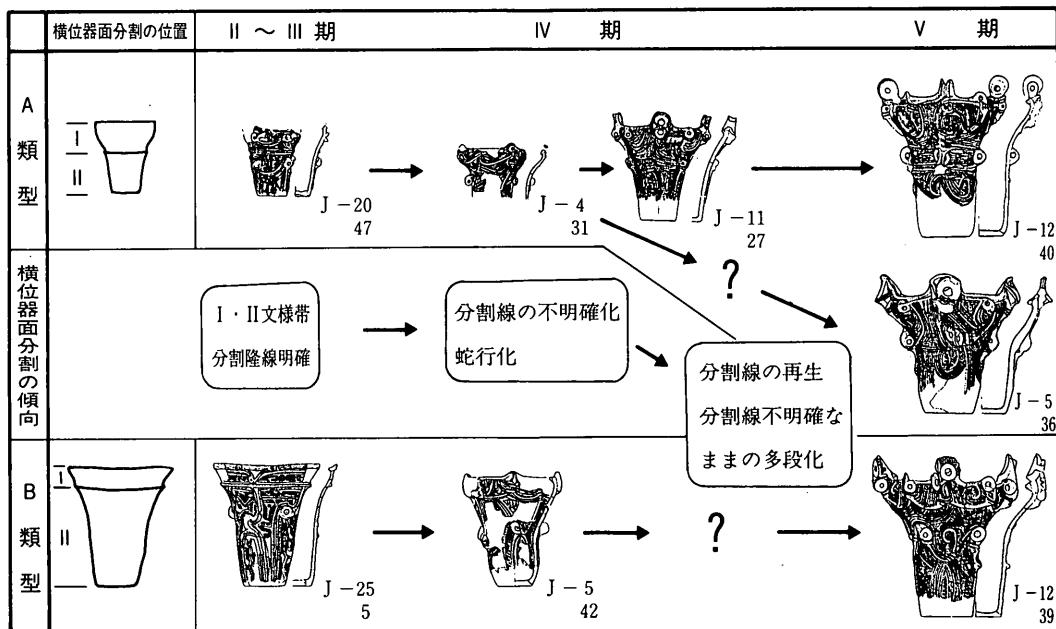
1個体の土器を飾るにあたって、「空間」を上下に分割するのが横位器面分割（＝文様帶）である。各文様帶を統括する懸垂文などについては「隆線装飾」の項で触れ、ここでは分帶方法を中心見ていく。特に、「焼町土器」においては、隆線を使って分割・分帶線を明瞭に示すことが少ない傾向を示している。

III期 この段階で、J 20住32に代表されるA類型と、J 25住5（II期2段階の可能性もある）に代表されるB類型の2者が認められる（第3図）。A類型は、I文様帶が頸部を含めて幅広く設定されている。一方、B類型のI文様帶は幅が狭く口縁部文様帶のみで構成され、頸部以下がII文様帶となる。いずれもII文様帶では装飾が体部下半の底部近くまで施される。

装飾の展開は文様帶の幅に従い、A類型では、幅広のI文様帶で横位の弧状装飾が発達し、B類型に比べ幅の狭い体部でも横位方向の装飾が見られ、縦位の懸垂文は短く付け足し程度となっている。一方、II文様帶が広くなるB類型では、縦位の変形「h」字状懸垂文が発達している。

IV期1段階 A類型では、J 4住31のようにI文様帶とII文様帶の境に明確な文様帶分割隆線を持たない例がでてくる。B類型においてもJ 5住42のように、直線的であった分割隆線が突起部分を基点としてやや弧状となり、変形してくる。また、A・B類型ともに体部下半部の装飾が底部付近まで及ばなくなる。

IV期2段階 A類型は文様帶の境が不明瞭である。J 11住27のように文様帶の境界部分に口縁部文様帶の隆線・沈線装飾が横流れしながら、不明瞭な文様帶分割を行う。B類型には、隆線上を刻むなど、勝坂式土器の要素を取り入れた例（J 11住26など）が見られる。A・B類型ともにII文様帶下半部の無文化傾向が続く。



第4図 「焼町土器」横位器面分割の変遷模式図

V期 A類型が文様帶分割の方法によって2分類できる。A-1類型は前代から引き続き文様帶の境が不明瞭な例で、J 5住36などである。A-2類型はJ 12住40のように横位の楕円形区画文が体部に配置され、文様帶の分割を明瞭に行うものである。A-2類型はIV期の可能性を持つJ 11住29、42に現れ、この時期に文様帶分割の傾向が定着する。

いずれも、口唇部の把手が発達し、I文様帶の隆線・沈線装飾が及ばないI-1文様帶が形成される。II文様帶の下半部は無文化が進む。B類型は、J 12住39に見られるように、I文様帶とII文様帶の分割隆線の弧状化が著しくなる。II文様帶内は、明瞭な分割線を持たないものの、頸部(II-1)、体部上半(II-2)、体部下半(II-3)、底部付近の無文部に分離され、文様帶分割の傾向が見られる。

VI期 IV・V期に発達した「焼町土器」が急速に衰退するため、本遺跡では系統関係を追える良好な資料が少ない。あるいは、川原田遺跡においては、V期との間に若干の空白期間が存在するのかも知れない。J 46住3はA類型の系譜を引きI-1文様帶には横位の平行沈線が施され、I-2文様帶とII文様帶が見られる。

B 縦位の器面分割（装飾単位）

円筒形である土器の装飾は、一度に全てを見ることができない。そのため、器面を縦位に分割し、各々を1つの単位として「場面」を形作り、それが横方向に展開していく。「場面」の変化は「時間」の分割につながることが多いと推定される。縦位器面分割（装飾単位）では、土器装飾全体をどのような「場面」に分割し、また統括しているかを見ていく（カラー図版13～16）。

「焼町土器」の場合、器面分割の単位は、口縁部の把手、文様帶を貫く形で「空間」を統括している懸垂文によって知ることができる。川原田遺跡では、完形土器が限られるため、III期からIV期の流れを概観するにとどめる。

III期では、4単位を基本にしているようである。これが、IV期1段階からくずれ（J5住26など）、IV期2段階までは、口縁部が4単位であっても、体部が3単位（J11住26）や5単位（J11住27）であったり、口縁部5単位（D77-228）の例などが存在する。このように、IV期の「焼町土器」の発展期にはさまざまなバリエーションが現れる。しかし、横位器面分割（文様帶）の分割線が再び明瞭となりはじめるV期には、縦位器面分割（装飾単位）においても、縄文土器の中で主流を占める4単位に戻る傾向が見られる。VI期では、完形に近い「焼町土器」がJ46住3しかなく、この例では3単位となっている。

この他、IV期を主として体部の懸垂文が横流れし、口縁部で規定した単位を越えて装飾が横方向に展開する。これは、「焼町土器」に特徴的な傾向である。

C 隆線装飾

勝坂式土器の隆線装飾が、器面の分割や細部での区画といった「枠」を設け、その上で発達・変化する方向をとるのに対して、「焼町土器」では、成立当初から極力隆線による分割線を少なくし、懸垂文を中心とした隆線を蛇行させて器面を飾ることを主眼としている。特に、連結部に貼付文を持つ蛇行懸垂文は、「焼町土器」を象徴する主装飾として、また、各々の装飾を統合する要として全時期を通して見られる。

川原田遺跡での基本となる懸垂文は、II期のJ51住7の①蛇行クランク懸垂文と②変形「h」字状懸垂文の2者を継承したものと考えられ、いずれも、連結部に貼付文が付く。

II～III期 隆線の形状は、丸棒状の粘土紐を貼付しており、単独の貼付文やその周辺で舌状に整形される場合がある。阿玉台式に見られる断面三角形の隆線はなく、勝坂式土器の一部で見られる半截竹管によって断面カマボコ形に整形する例も見られない（第3図）。隆線上を刻む例がまれに存在する（J51住8）が、刻まないのが基本と考えられる。

隆線は、文様帶分割線や懸垂文に利用されている。懸垂文はA類型では横方向に、B類型では縦方向に蛇行する傾向を示し、隆線と隆線の連結部に円形貼付文などがつく例が多い。隆線には沈線文が2条沿うが、この段階では、沈線装飾の大半は隆線から独立している。

IV期1段階 J5住42では、文様帶分割線が蛇行する傾向を示しはじめる。また、逆「U」字状部分に新たな隆線が加わり、円形貼付文との境にコイル状の装飾が付く。このコイル状の装飾（貼付文の場合と沈線で描く場合有り）も「焼町土器」の特徴的なものとして多用される。沈線文は、隆線の動きに規定されるまでには至っていない。

IV期2段階 隆線の形状は、やや高さが増す傾向にある。これは、沈線が深くなることとの相

乗効果によって、彫りの深い装飾を生み出している。

隆線の用例を見ると、J 11住27のようにI文様帯とII文様帯を明確に分割する隆線がなくなることによって、I文様帯で大きく横流れした隆線が縦位器面分割による1単位「場面」を大きく越えて、本来、別の単位に属していたII文様帯の懸垂文と連結する傾向を示す。これによって、横位器面分割（＝文様帯）・縦位器面分割（単位装飾）の規制が緩和され、「焼町土器」特有の流動性のある装飾が完成を見る。また、上半部隆線や口縁部突起の単位数に対して、下半部隆線の逆「U」字状隆線の単位が増えるなど、変則的な動きを見せる。

連結部の突起は単独の円形貼付文ではなく2個1対の眼鏡状が主流となる。また、一部は正並列せず、斜め「8」字状にゆがむ例が見られる。古くはIII期J 9住11に存在するが、主流となるのはこの時期からであり、隆線の横流れ傾向と連動した変化と考えられる。また、コイル状装飾も定着する。沈線装飾の多くが隆線装飾に規定され、沿うものが増加する。

V期 IV期の傾向がさらに進む。J 12住39では、隆線の横方向への展開がさらに進み、上半部隆線の変形も進む。ただし、J 12住40などのように、体部に横位の楕円形区画文を配し、流動的な装飾を枠に納めようとする傾向も定着する。また、連結部の眼鏡状突起は斜め「8」字状の例が主流となる。

VI期 少数例で見ると、懸垂文は再び単純化している。

D 貼付文・突起

突起では、当初懸垂文に絡む単独貼付文が2個一対の眼鏡状貼付文となり、その後、斜め「8」字状にゆがむこと。貼付文を重ねる傾向（J 5住47など）がでてくることなどがわかる。また、懸垂文と絡むもの以外では、口唇部から上方へ発達する突起が存在する。川原田遺跡では、IV期1段階のJ 4住31で、口唇部上に小型の円形突起が見られる。IV期では、2段階で複合化の様相を呈し、さらに上方に大型化する。V期には、複合化のピークを迎えるが、VI期には衰退し、他遺跡で見られる複雑化した突起は見あたらない。

E 沈線装飾

沈線を描くにあたっての施文具の選択、施文手法。さらに、描き出される文様とその配置などについて変遷を見ていく（第3・5図）。

III期 半截竹管の外側面（セ部分）を使って、一本の太い（5mm前後）沈線を引く。こうした沈線は、阿玉台式土器や一部の勝坂式土器に見られる半截竹管のハラを使った平行沈線とは大きく異なっている。また、器面への施文がひじょうに浅い傾向を示すのもこの時期の特徴である。また、単純に沈線を引くだけでなく、押し引き文（J 51住10）や沈線内を再度刻む手法（J 34住29）が残っている。施文部位は隆線に2条ほど沿う例が多く、隆線から離れて独立した文様には大型の鋸歯状文や三叉文などが存在する。



第5図 沈線文の施文手法

IV期Ⅰ段階 この時期には、J5住42、J4住32例のように太めの単沈線が引き続き使われるが、器面に対して深く施文される傾向が見られ始める。J35住8では、太く浅い単沈線とともに口縁部区画文内に、押圧する手法が残存している。隆線に沿う沈線が増殖する傾向がうかがえ、独立した三叉文などが埋没して目立たないようになる。

IV期Ⅱ段階 押圧・押し引きの手法が見られなくなり、隆線に沿う単沈線が条数をさらに増やし盛行する。狭い器面において条数を増すため、密接して引かれた一本一本の沈線は、細く深い施文に変化してくる。このことによって彫りの深い装飾効果を見せる。また、この点は伴出する勝坂式土器の沈線手法との違いを明確にしている。

V期 隆線に沿う単沈線の使用が最も多くなる。III期から続く器面をなでるような浅い沈線が一部で残存する（J12住40）が、全体的には前段階の傾向が続き、施文が深くなり、鋭い施文工具で器面を切るような手法が見られる（J12住41）。また、検討の余地があるもののJ5住47を一応この段階に置くと、この段階から川原田遺跡では「焼町土器」において半截竹管による平行沈線の使用が定着するらしい。

VI期 この時期には、単沈線が姿を消し、代わって半截竹管による平行沈線文が主流となる。しかし、V期に比べ沈線装飾の量は一気に減少し、隆線に沿う沈線などがわずかに残る程度となる。

F 刺突文

刺突文では、隆線装飾などに囲まれた空間を充填する手法があり、IV期～V期を通じて見られる。これは「焼町土器」に多用される手法の一つである。

G 縄文

縄文は、II～III期に盛行していたものが、IV期の「焼町土器」には皆無に等しい状態となる。しかし、「焼町土器」の衰退するVI期になり再び見られるようになる。

H 小結 「焼町土器」の特徴

IV期には、阿玉台式土器の影響がほとんどなくなる。また、東から北日本一般に伝統的に好まれてきた縄文が「焼町土器」から失われていく。このように、このIV期・V期は、土器装飾上では、東との交流が薄れ、もっぱら勝坂式土器との関係が問題となる時期である。ただし、その関係も装飾要素が頻繁に交換されるのではなく、「焼町土器」は「焼町土器」で、勝坂式土器は勝坂式土器で各々、装飾内容を発展させた時期である。

「焼町土器」について見ると、縄文の排除という一見目立った部分での変化が認められるが、基本的な装飾の構成や要素は前代からの発展途上にあると言える。すなわち、

1. 横位器面分割において分割や枠の設定、「区画すること」を極力さける傾向の継承と発達。
1. 連結部に貼付文をもつ、連結隆線文が装飾を統括していること。
1. この隆線文は、蛇行することによって器面の分割や区画にとらわれない流動性のある装飾を

形作っており、隆線の動きが前代以上に大きくなること。

1. 連結部の貼付文や口縁部の円文が前代を継承しながら発達すること。

1. この懸垂文には必ず複数の沈線が沿うこと。そして、沿う沈線の数が増加していくこと。

こうした「焼町土器」の個性を成り立たせている特徴はすべてII期から存在していたものであり、そのすべてについてIV期・V期は発展段階にあると捉えることができる。

このII期から継承された装飾を最大限に発達させ、同時期の勝坂式土器との差異を強調したIV期・V期の「焼町土器」が、御代田町を含む東信地域の独自の縄文中期土器文化の到達点の一つといえよう。

この時期、「焼町土器」と共通する「曲隆線」や「流動する」装飾を趣向する土器群は、千曲川中流域から北陸・越後地域でも発達する。今後は、その方面的土器との比較を進めていく必要があろう。

(5) VI期の概要

この時期に該当する資料は、住居新旧関係資料に使用したJ3、5、6、30住のほか、J1、8、46、47住、土坑ではD84、115などに存在する。細分も可能である。土器組成では、勝坂式土器が増加の傾向を示す。「焼町土器」は数を減らすだけではなく、小型化し、装飾自体にも勢いを失い簡略化する。この時期の「焼町土器」の特徴は前項で述べたとおりである。

4 おわりに

「焼町土器」が注目されてから十年以上が経ち、その間、確実に資料の蓄積がなされてきた。しかし、その多くは断片的な資料であったり、「焼町土器」のある段階に限定されたものであった。その点、川原田遺跡の資料は質量ともに充実しており、「焼町土器」を検討する上では欠かせない資料になるであろう。このことは、川原田遺跡が縄文中期中葉に花開いた東信地域の独自な土器文化解明の拠点の一つになることを示している。

今後、『川原田遺跡』刊行後に予想される研究の本格化にともない、多くの研究者による川原田遺跡の資料の再検討の機会や場が必要となってこよう。同様に、この地域の独自性ある縄文文化を広く知っていただくための機会や場の整備が望まれるところである。一方、残念ながら「焼町土器」を代表する川原田遺跡の集落は、その大半を掘り終えてしまっている。このことが「川原田式土器」と言いづらい点の一つでもある。研究者の側から言えば、同一遺跡内に再検証のための発掘調査可能な地区が保存されていること、が望ましい。また、研究者でなくとも、地域の文化を代表する遺跡が残されており、いつの時代になっても、失われた時代の文化を多少なりとも実感できる場があれば理想的である。そのためには、今後、周辺に縄文中期中葉の良好な遺跡を

探しあてることも必要となってこよう。

『川原田遺跡』の報告書刊行は、御代田町を含む東信地域の縄文中期中葉の文化解明の第一歩といえる。「躍动感あふれる」独自な土器を、再び埋もれさせないためにも、今後の動きに期待したい。

註

- 1 土器編年の基準は、「焼町土器」編年が確立していないため、周辺地域の土器である勝坂式土器や阿玉台式土器の編年を用いる。勝坂式の編年は筆者も参加した下総編年（下総考古学会1985）を基準に、井戸尻編年（藤森ほか1965など）を併記した。阿玉台式の編年は、西村編年（西村1984）に準じた。
- 2 この点が、筆者の分類の根幹である。ただし、「焼町土器」がこれのみで成り立っているのではないことは言うまでもない。「連結部に貼付文のつく連結隆線文」「隆線に沿う複数の沈線」などは必要最低限の条件として挙げられる。こう見ていくと、川原田遺跡ではII期でも2段階になって「焼町土器」の条件がそろうことがわかる。
- 3 本土器は、阿玉台式II類の内の新しい段階ととらえるべきかも知れない。ここでIII類とした根拠は、故西村先生の三郎作貝塚報告の第7図14の土器に見られる隆線や刻みの手法が本土器と類似していた点のみである。
- 4 この段階の土器については、「新巻類型」や「プレ焼町」と言った名称があり、統一されていない。この辺りの事情については、小林真寿氏がまとめている（小林1996）。筆者も、現段階では周辺土器型式・様式との対比を説明する上で「焼町土器古段階」としておいた方が、説明しやすいと考えただけであり、この名称にこだわるつもりはまったくない。また、小林論文を参考にされる方へ、その中で小林氏は、寺内の考え方として「『後田原IV類』を『焼町土器』に含めている。」としているが、「後田原IV類」の範囲を広くとりすぎているための誤解である。寺内の概念では、小林論文に掲載されている野村氏の言う「後田原IV類」の半数は、「焼町土器」ではない。
- 5 文様帶分類に付した1～3は、ここでの便宜的な分類である。

参考文献

- 小林真寿 1996 「浅間山麓の縄文中期中葉土器論 焼町土器の研究」『長野県考古学会誌』80
- 下総考古学研究会 1985 「勝坂式土器の研究」『下総考古学』8
- 高橋 保 1989 「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟県考古学談話会会報』4
- 堤 隆 1992 「第一章 第二節 縄文時代 焼町土器」『御代田町誌 図説編』
- 寺内隆夫 1988 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ—型式変遷における一視点—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』I
- 1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』
- 長門町教育委員会 1987 『大仁反遺跡』
- 西村正衛 1984 『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として』
- 野村一寿 1984 「塩尻市焼町遺跡第1号住居址出土土器とその類例」『中部高地の考古学』III
- 藤森栄一ほか 1965 『井戸尻』